広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本のビジネス : 日本における教育とその社会また企業に与える影響
Author(s)	シェーン リンズィー,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1993 : 25 - 33
Issue Date	1994-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039345
Right	
Relation	

日本のビジネス
ー日本における教育とその社会また企業に与える影響ー

シェーン・リンズィー

日本の教育制度

日本の生徒は西洋の同じ年代の生徒達より高い数学の得点を取ります。1967年にHUSEN氏に、13才の日本、アメリカ、中東、ならびにヨーロッパの国々の生徒に行われた調査の結果によりますと、日本人生徒の平均数値は31.2でした。これは標準偏差に直せば16.9でした。逆にアメリカの生徒の平均得点はわずかに16.2でした。そして標準偏差は13.3でした。それぞれの国で行われた全体の標準偏差値は14.9でした。日本とアメリカとの違いは15.0ポイントの差がありまして、ざっと１標準偏差の差がありました。つまり日本人生徒の84%はアメリカ人生徒の平均得点よりも高い得点を取りました。同じような研究は18才の数学を専攻している生徒達についても行われました。その結果はもっとはっきりしとした形で見られますが、日本人学生の90%はアメリカ人学生の平均数値よりも高い得点を挙げています。またここで注目する価値があると思うことは、日本の学生たちは９つの違った科目を取りながらもこのレベルに到達したということです。アメリカの数学の専攻学生はただ４科目しか取っていません。それらのうちの２科目は純粋又は応用数学でした。数学は日本の生徒たちが優れた唯一の科目ではありません。理科の調査でも日本人生徒は高いレベルを占めています。物理、生物学、化学、地学を含む研究には、日本人学生は一番高い得点を記録しました。このテストは、10才と14才という２つのグループについて行われました。このテストは、知識、理解、実験的方法につい問題を作り、そして解決する能力を測るためのテストでした。これらのグループにおいて、日本人学生は１位を取りました。実に日本人学生の81.9%は、アメリカ人学生の平均得点より高い得点を取りました。すべての比較可能な科目のテストでは、日本人の学生はアメリカ、ヨーロッパ、中東の学生よりも優秀な成績を示しています。事実、日本の子供たちと競争ができる他のグループは、韓国人並びに台湾の生徒たちが挙げられます。ほとんどのテストで、この３つのグループの間にはあまり差がありません。　これらの結果はどういうことを意味するのでしょうか。日本やアジアの生徒の知能が遺伝的にもっと高い、すなわち白人や黒人や中東の子供たちの知能よりも高いということを意味するのでしょうか。

言葉を使わないでIQを測るためのテストが日本人又はアメリカ人学生に数回行われました。1977、1982Lynnにより行われました、Wheshler tests又Misawa, Motegi、Fujita、Hattori らによる共同テストによりますと、日本の子供たちのIQは何と113 という高い数字が出ました。環境や時間などの差異を調整されたとしても、日本人のIQというのはアメリ

カ人のIQより標準偏差値で½から⅓ほども高いのです。

また別のIQの研究すなわちによって２才から16才までのアメリカの白人の子供たちと比較して日本人のIQを測った研究によれば、日本の２才から６才までのIQは、アメリカの白人の子供達と比べてかなり低く、一方６－10才の子供たちについてはIQにはあまり差がありませんでした。10～16才の幅で見ると大変大きな差があって、日本人の子供の方がはるかに高いわけです。

この現象については２つの解釈を挙げることができます。１つは、白人の子供のIQは遺伝学的は日本の子供たちよりもより知的であり、日本の子供たちはその低い知性をすばらしい教育制度によって克服するわけです。そして10才になるまでに白人の子供たちを越えることができるわけであります。

もう一つの考え方は、日本人の子供と白人の子供は、同じ受皿を持って生まれてくる。しかしながら日本の子供は早い時点の発達が遅れているということであります。６才になるごろまでに白人の子供に肉体的に近づいてくることができ、10才ごろになりますと教育的なシステムから恩恵を十分受けて、白人の子供たちを越えることができるというわけであります。

私は２番目の考え方がより正しいと思います。ここで、日本の教育システムの内情をかいま見るならば、日本の子供たちはなぜアメリカの子供たちを越えることができるのか、すぐに分かると思います。それは日本人の子供は自分の知的レベルを達成するために勉強しているからであり、又日本の社会がこの高い知性を達成するために一生懸命勉強することを要求しているからであります。

日本人生徒たちはアメリカ人生徒達と比べると単純にもっと多くの時間やエネルギーを勉強に費やしているということであります。このよい例は、日本の中学生であります。平均的な中学生の生活は、朝 7：15分に始まります。起きて服装を身につけて、朝食を早く食べて 7：45分に学校へ出発するわけです。次の20分間自転車に乗って学校へ行きます。8：10分のベルに間に合うようにスピードを出して行きます。次の６時間は非常に背中が痛くなるような椅子に座って、注意深く先生の話を聞きます。ほとんど先生と生徒との対話のない状態で進むわけであります。やっと 2：30分になって教室を掃除してからサッカーの練習へ行きます。 6：30分になって家に帰って夕食を早くすませ、塾へ向かって行って数時間お勉強をします。最後に10：00ごろ家に帰って自分の部屋へ急いで帰り、眠りに落ち込まないうちに宿題を終わるわけであります。

同じようなアメリカ人中学校生徒はあまり強制的なスケジュールがなくて日本の生徒と比べて学校とか勉強というものが生活に占める割合は日本ほど大きくありません。一日の始まりは同じ、学校はだいたい同じ時間に始まって終わります。そしてクラスで教えられている内容は似たようなものであります。しかしながらプレゼンテーションの方法は完全に違っています。日本の生徒というのは知識の詰め込みでありまして、先生との関係はい

つも受け身的です。アメリカの先生達の教え方は、生徒を何とかして勉強するように誘導しようとするわけです。そうしないと生徒が聞いてくれません。先生と生徒の間は、もっと平等な関係で進められて行くわけであります。

日本人生徒の一日が半分終わった頃、アメリカの生徒達はもうすでに学校へ行ったことなど忘れてしまい、そして自分の他の生活を準備するところにあります。その生活は、スポーツ、テレビ、趣味、友達、又遊びなどがあります。日本の中学生は教育的なものを中心に置いており、そして学んだこと以外のことをする時間はないという状態です。これに対して学校並びに教育というものは、アメリカの中学生の一側面にしか過ぎないということであります。日本人生徒のこういった１つの物に全力を尽くして忠実に働く態度は、社会人となっても維持されます。

日本の中学生にインタビューして、将来何になりたいかということを尋ねると、彼らは私の質問に答えることができませんでした。とても入学試験に合格できないのではという不安で気持ちが抑えられており、試験以外のことを考えるならば回りの人達に申し訳ないと思っている節があります。この試験を越えて人生という像を見ることが出来ていないのです。仙台から来ている女子中学生に、「七夕祭に行きましたか。」と尋ねると、「行きませんでした。七夕祭に行く中学生は入学試験に落ちますよと言われているからです。」という答えが返ってきました。

ですから、日本の教育システムは西洋より良いのかという質問が出てきます。この質問は答えることが出来ません。しかしながら、日本の教育システムは人々に対して優れた数学又は理科に対する知識を作り出すことが出来るかどうかということになりますと、答は決定的にYES と言えると思います。しかしこういったシステムは子供たちにストレスが多くて、情緒的に非常に厳しいでしょう。知識を得ることだけでなく、若年代と言うのは楽しむ時、又個人的成長をするべき時でしょう。

日本とアメリカの違った優先事項の例というものがあります。ある数学、理科の調査では、試験が終ってから子供たちにどのように自分たちの出来を感じるかと言うことを聞いたわけです。韓国人並びに日本人の生徒たちは、１番と２番をそれぞれ取りました。アメリカの生徒は驚くなかれ、最低の得点でした。しかしながら、どのように試験をやったかとその達成率についてアメリカの子供たちに聞いたなら、最も高い自信のほどを見せたわけであります。反対に日本人または韓国人は最も自信の無さを見せたわけであります。

ここに明らかにアメリカと日本の違った教育的目標が見えます。アメリカのシステムには個人を作り出すと言う目的があって、その個人とはどのような問題でも克服することが出来るという特徴であり、アメリカのシステムはこれを子供たちにもたらそうとしています。一方で、日本の目的と言えば、若い人々に対して知識を一杯詰め込み、辛い状態を堪え忍び我慢することを教える目的で一生懸命勉強して、なぜ自分が一生懸命勉強しているのかという疑問を持たずに勉強し続けることを、又いわゆる社会の一部になることを教え

ていると感じます。

日本の教育は社会に入るための準備である

もしも、テストの得点が良いということが教育の明確な物差しであれば、日本の教育制度は間違いなく優れていると言えると思います。しかしながら国内また国際における危機に直面した場合には、この10才の子供の数学成績は余り多くの価値を持つわけではありません。問題は日本の子供たちが、日本社会の一員又国際社会の一員として、責任のある態度をとれるかどうか、そういう準備ができているかどうかと言うことがポイントなのであります。

日本の子供たちは自分たちの社会に適応するように訓練を受けています。事実この道徳の訓練は、数学や理科といった科目と同じ位強調されていますし、場合によってはそれら以上に効果的になっているかもしれません。道徳の授業の時間には、社会的もしくは道徳的な１つの問題を提示し、そして先生並びにクラスの者が一緒にこれを話し合うわけであり、社会的平和又は調和を維持するためにこの状況に直面した場合にはどうしたら良いかと言うことを話し合う訳であります。交通信号の前で止まることや窃盗のような具体的な物又自己犠牲、遠慮のような抽象的なことが話されています。

これに日本の教育制度における本当に重要な様子が現れていると思います。生徒達の考え方をさらに叱ることで強化して、自分並びにクラスの友達が同じように考え、そして生徒の間で一体感という物を作るのです。平和で共存していくためには意識的に行動し、そして行動する前に他の人に与える影響を考えなければならないということを教えられています。

この教育制度の結果は、日本の社会のいろんな面で見られます。日本の人々は秩序に対して大変関心を持ち、どのように完全に秩序を守り、維持していくかということに心を砕いているのです。

こういった一定のやり方で行動し、そして反応していくという市民の義務感は日本の社会また企業においてのスムーズさを作り出しています。これは他の地域では見つけられない物であります。このスムーズさそしてグループ意識の良い例は、私が所属しているバスケットのクラブに現れています。クラブには決まった監督はいません。ただ学生の１人がチームのキャプテンであります。彼にはほとんど権力がなくて、監督として支持をする資格はないのですけれども、秩序を守っていくためにすなわち、今までに作りあげた秩序を維持するためには、チームのメンバーの皆が何でも彼の言うとおりにするようになるわけであります。アメリカの有名なバスケットチームの監督であるPat Riley は、我々のクラブのキャプテンほど練習を指示することができないのです。一方で平均的なアメリカ人達は、今までずっと養ってきた個性という物を守るために指導者の依頼に簡単には自分を曲げようとしない訳であります。もう１つの例ですが、警察官に呼び止められたりする場合には、日本人はほとんど例外なく、たとえ罪がなくても頭を下げ、すべての責任を取ろう

とするのです。アメリカ人達は、まず最初議論をし、例え自分に罪があったということを知っていても不平を言うことになります。こういった協力そして非協力といった例から分かるように、明らかに日本の社会とアメリカの社会の違いを表しているのであります。

まずその例として、日本の教育の目的は若い人々が社会の責任ある一員になることに置かれているということに関して話をするならば、答として正にそうなっていると言えると思います。日本の子供たちほど社会の必要性にぴったりと合うように訓練されている国は他にない訳であります。またどの国も日本人ほど辛抱強く、また社会的に洗練された国民はいないと思います。

日本の大学

日本の18才の学生の約38%は、413 の大学もしくは531 の短期大学へ行くことになります。この割合は、アメリカ合衆国と同じぐらいであり、かつイギリスやヨーロッパ諸国と比べてみますと、２倍３倍の数字となっています。日本の大学制度の規模、入学定員、また構造もアメリカ合衆国型でありまして、ヨーロッパ型ではありません。

日本の大学におきましても確立された階層社会というものがあります。最もその名誉ある大学といえば疑いもなく、東京大学と、次いで京都大学が挙げられます。それに続くのが、10エリート大学であります。それらの大学は、国立大学と２つの私立大学、早稲田と慶応であります。その後には約40ぐらいの大学が地方ではかなり名声を博しておりますけれども、全国レベルで見ていきますと、それほど有名ではありません。

一般的に見て、日本の国公立大学は、より高い質を与える教育機関として見られています。非常に多額の政府の資金を使っておりますので、アメリカと同じような質の高い教育を提供できるわけであります。一方で、私立大学では授業料というものに財政的に大変頼っております。そして国公立大学に追いつくのは大変難しい状態であります。といいますのも国公立大学は充分な資金で賄われているからであります。国公立大学の授業料というのは、あまり費用がかからない。また入学試験の基準におきましても全員が共通の試験を受けて、必要な得点を取りさえすれば、どこへでもまったく平等に入学するチャンスがあります。一方アメリカの場合を見てみますと、非常に高い授業料があり、学力的には資格があっても財政的に援助額が限られている生徒にとって、アメリカのIvy Leagueの学校に入ることは許されない状況であります。その結果としまして、日本中からやって来た学力の高い生徒たちは、東京大学に集まり、アメリカでは学力の高い生徒たちは均等に振り分けられるという形になっています。

その結果としまして、日本の社会的な地位の高い人達の大部分といっていい程が東京大学出身であります。過去30年間を見てみますと、日本の首相の½以上が、日本の政府高官の⅔の人達、また企業の非常に高い身分の人々は、東京大学の卒業生となっています。そして、もしこれらの地位というものが東京大学の卒業生によって占められていないとしても、大部分はトップの位置にある他の11大学の卒業生によって占められています。と言い

ますのも東京大学並びに他のトップにつく大学卒業生は、日本の社会の中で非常に高い位置を占めているわけであります。日本の人々はこういうことをよく認識しております。言い換えれば、社会的な日本での地位を達成するために12の大学のいずれかを卒業しなければならないということです。これらトップに位置する大学の１つを卒業すると、卒業生はほとんど高い地位についたり、良い会社に入ることができ、また大変昇進の機会に恵まれるわけであります。

日本におけるこういったトップの位置を占めている大学に入るその動機付けと言うものは限りなくアメリカにおけるHAVARDへ行こうとするアメリカ人にとっての動機付けよりも大きなものがあるわけであります。したがってトップに位置している大学を卒業する必要性が極めて大切なわけであります。こういったトップの大学に入るための激しい競争は、今日の日本に存在している受験地獄の原因の一つであります。またそういうことによりまして、教育ママが本当に多額のお金を使って子供たちにもっと良い予備校に通わせたり、子供たちに毎晩勉強させ、塾に送り込むと言うことが起こるのです。そして一般的には子供の教育というものが家族の中心となってきている訳であります。

ですから日本人達というのは極端に大変な勉強を若い時にし、そしてトップの大学へ入ろうとするわけでありますが、大学へ行った時に受けるその教育とはどんなものでしょうか。有名度によって大変違いはありますけれども、トップに位置する日本の50の大学の教育にはそれほど大きなまでの差はないわけであります。西洋人の目から見た場合非常に奇妙なことではありますが、日本の大学で受ける教育は学生の将来にそれほど重大な意味はありません。

将来の雇用とは、どのように大学で勉強したか、どんな科目を勉強したかということよりも、どの大学へ行ったのか、そしてそこに行く前に何をしたか、つまりそこへ行く前の学歴ということによって決定的になってしまうわけであります。追加的に申せば、ほとんどの企業というものは社内研修というものを行っておりまして、大学の卒業生といえどもその仕事をこなすために必要な技能というものを期待していないわけであります。大学で何を専攻したかということは多くの場合全く将来の仕事と結びついていないわけであります。以上述べましたこの様相から見まして、日本の大学生たちは自己の動機付けというものを完全に見失っているのであります。と言いますのも学生時代というものは、自分の満足を越える以上に勉強するということでありますが、これに対しては報酬がないということを知っているわけであります。そしてそのことが勉強するための動機付けになっていないわけであります。しかしながら、日本の子供たちは非常に若い時から植えつけられた強い勤労的な倫理観というものからしまして、かなり多くの生徒たちは大学へ入ってもまじめに勉強を続けているわけであります。けれどもここではっきりするのはその勉強する習慣というものを非常に緩め、そしてゆったりとした生活を送る強い傾向が見られます。
事実今日の日本社会におきましては、激しく厳しい勉強をし、そして成長していこうとい

うアメリカ人学生のようなタイプではなく、大学生活というものは休息の期間であると考えられています。４年間ほど若い男女は中学、高等学校の長期間の勉強から休息して、一時的に日本のストレスまた競争から逃れています。

現在の日本の教育システムは、日本がアメリカ軍によって占領された時に出来上がったものです。そしてそれはアメリカの制度と似たような機能をするように設計されておりますけれども、日本の必要性に合わせて、新しい日本のやり方がここで根付けられております。新しい目的、新しい日本の優先事項を加えてであります。ここで順序が全く逆ということが言えるかと思います。西側におきましては子供というのはとにかく楽しみ、そして冒険などをする時であって、そして徐々に責任と仕事と言うものに関しての感覚を身につけていくわけであります。しかし日本の制度では、非常に早期の幼児教育で生徒を叱り、勉強をさせ、それから始まるということであります。

もうひとつ挙げられることは、企業における研修の逆効果によって、大学の役割が変わったと言うことであります。私企業と言うものがほとんどの高等教育また研究期間の役割を演じてきております。これはアメリカにおいて大学が満たしてきたものであります。その結果と言うのは、日本の大学で受ける教育は、日本の社会において比較的に小さな役割を果たしていると言うことであります。

日本人は、西側の人々の目で見ればとにかく低姿勢、頭を下げ、そして自分自身を低くしているように映ります。こういった態度がどうしてあるのかという１つの理由は、一般的に日本人の他人または家族との関係の見方は、西洋人のそれと違っています。日本人はアメリカ人よりも社会的義務感を感じ、また責任ある行動をとろうとしているわけであります。家におけるつながりは、家族だけにとどまるものではなくて、近隣の人々にも職場の人々にも、また毎日交通機関の中で出会う人々にまで広がっていきます。こうした関係は、子供たちが学校に入るまでに形作られるわけでありますけれども、この義務的な関係が明らかに先生と生徒との間にも見られます。それぞれの授業が始まれが、生徒たちは一緒に立ち上がり、先生にお辞儀をするのです。先生は授業の内容を子供たちに教えるだけではなく模範となり、生徒たちに責任ある市民になるために必要な熟練を教えることになるわけです。そして生徒は一生懸命授業の内容を覚えるだけでなく、どのように自分自身がふるまうべきかを先生に見て習う義務があるように考えています。日本の先生たちは生徒に躾をし、そして生徒たちは不平を言わずに躾を受けます。このように疑いもなく父親と子供のような関係が先生と生徒との間に築き上げられています。こういった父親と子供のような関係が学校だけで終わるわけではなく、社会にも職場にも移ります。

西側には、仕事は家族を維持し、娯楽出来るようにお金を得るためのものという役割を演じていますが、日本には職場に入るということは非常に長く待ち望んでいたことであります。いろいろな場合におきまして、これはまさに結婚のようなものでありまして、とても大きな約束、コミットメントであります。生涯に続くものと考えられており、そして職

場の人にとっては、新しい家族を手に入れることになるわけであります。

従業員は、上司に尊敬の念を持ってつき合い、学生時代の先生との関係に対応するものであります。代わりにその上司たちは、従業員に対して金銭的な支持をしたり、又たびたび情緒的な支持などをすることがあります。この上司又先輩という人々は、たとえば部下に近い親戚の葬式に参加する義務があり、又部下の結婚式に出席する責任があります。例え個人的関係が両者の間になかったとしても、そういうことが起こるわけであります。このような出来事の時に上司は兄や伯父のような扱いを受けるわけであります。

アメリカ人労働者は、日本人労働者に見るのと同じような従属性を示す必要性を感じていません。実はアメリカ人労働者は、自分が上司と同じレベルの人間であるということを示そうとします。アメリカ人ビジネスマンのグループを見ておりますと、だれが上司なのかということを判別することができません。しかし、日本人ビジネスマンのグループにはこれが明白に出ています。上司というものは、会社の中心にいるわけでありまして、そしてすべてのものが頭を下げ、そしてブリーフケースを運ばせることになり、他のどのような些細なことでも丁寧に扱われることになるわけです。これはまさに日本の学校の先生のようなものであります。日本人は誰が上司なのか又特殊な状況における社会的な階層に合うようにどのように行動すれがいいのかということを絶えず意識しています。アメリカ人の目で見ますと、上司の暑苦しさは非常に気分が悪くなるものであり、又部下の人達の服従心は非常に自分を卑下しているという風に映る訳であります。そして日本人の目におきましては、これらの行動とは社会又制度の秩序を維持するためにかけがえのない道具となっているのです。

私がハワイ州で生活していた時、ツアーガイドとして毎日日本人のツアーグループと接する機会がありました。ユタ州で生活した時にもスキー場でよく見かけました。その家族みたいな絆のある会社は一緒に働くだけでなく、一緒に娯楽して、そして一緒に旅行をするのであります。日本の会社はまるで学校の修学旅行のような形で、妻や家族を置き去りにして一緒に旅行をするのです。もちろんこの状況におきましては、会社が旅行費用を出します。このようにして家族のようなつながりを強めていき、これが従業員にとりまして自分が会社にとって正に不可欠であるという風な気持ちを起こさせるのです。

日本人の男の人の生活は仕事中心に回転し、時間を正に職場で費やしている訳であります。したがいまして多くの自分の必要性というものは職場で満たされていますので、家に帰ってきた時、妻や家族との関係を強めるためのエネルギーとか願望すらありません。こういった会社の非常に広がった役割というものは、アメリカでは、家族によって満たされています。日本の社会における労働者にとっては、その家庭や家族の意味またその人にとっての大学の教育の意味はアメリカのほど大きいとは言えないのです。

結論

この論文のテーマは、日本のビジネス、日本における教育とその社会また企業に与える

影響という視点で取り上げたものであります。この論文を書くために、日本における教育を分析し、アメリカと比較し、日本の教育制度が、社会また企業のどんなところに現れているのかを調べようとしたわけであります。その主な点は、下記の通りであります。

長時間の勉強またよりよい数学また理科の訓練を提供することを通して、日本の教育制度は優れた工学又科学的問題を解決する能力のある人々を作り出します。

学校にある父・子供のような先生生徒の関係また学校における先輩後輩といったいわば義務的とでも言うべき社会的関係はビジネスの世界に移ります。日本の企業には、社長と社員との間で同じような親子関係というべきものがあるわけで、企業の社員同士にはまるで家族のような関係があるわけであります。

日本人の子供は、若い時長時間を勉強に費やし、遊ぶ機会がほとんどなくて、遊ぶ方法を習わないわけであります。勉強ばかりして過ごすというわけであります。大人となっては、仕事ばかりして過ごすわけであります。仕事の虫となってしまい、人生を楽しく過ごすということがわからなくなってしまうわけであります。

学校で受ける道徳の授業は、本当に効果があり、スムーズで丁寧な、また秩序正しく犯罪率の大変低い社会をもたらす理由のひとつとなっています。

日本の大学で受ける教育は、学校によってそんなに変わりませんが、トップに位置する大学に入るために激しい競争が起こっています。といいますのもトップに位置する大学で受ける教育を求めているわけではなく、それらの大学に入ることを通して、よりよい仕事を得る機会を求めているわけです。

日本の会社は大変大きくて、非常にお金持ちでありますので、会社は社内研修を提供する余裕があり、研究また発展に多額のお金を投資する余裕があります。その結果として、日本の大学の、学生が社会に出るための訓練という目的、また研究機関としての目的が減少しています。

私のテーマは大変幅広いのですが、この研究を通して、私は日本の教育制度は非常に効果的に子供たちを社会に出すための訓練となっており、優れた数学また理科の能力のある人々を作り出すことが分かり、また社会の秩序を守るために必要な技術を効果的に教えていることが分かりました。そしてその子供たちが社会に出ると、非常に柔順に勤め、仕事に貢献しているわけであります。反面、日本の教育制度では、人間性を伸ばすということをあまり重視していないので、批判する余地があると思います。

主要参考文献：

Robert C. Christopher, The Japanese Mind, 1983, Ballentine Books.

Bruce S. Feiler, Learning To Bow, An American Teacher In A Japanese School, 1991, Tickner and Fields, New York.

Richard Lynn, Educational Achievment In Japan, 1988, The MacMillan Press.